だいこく通信　第六十三号「冬の号」

ごあいさつ

最近は地震・火事などの災害、クマによる被害など自然の大きな力を感じることが多くあります。日頃からの備えを大事にしたいと思う年の暮れです。

社報「だいこく通信」第六十三号をお届けします。今回の内容は、新年のご祈祷受付時間、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。

なお、当初の予定では十月の甲子祭に社報を発行する予定でしたが、諸般の都合によりお休みいたしました。予定が変わりましたことをお詫び申し上げます。

令和八年　新年のご祈祷受け付け時間

一月一日（木）
午前〇時～午前一時
午前六時～午後五時
一月二日（金）・三日（土）
午前九時～午後五時
一月四日（日）～七日（水）
午前九時～正午

令和８年の厄年一覧(数え年)

	前厄	本厄	後厄
男性の厄年	24歳 平成１５年生 ひつじ	25歳 平成１４年生 うま	26歳 平成１３年生 み(へび)
	41歳 昭和６１年生 とら	42歳 昭和６０年生 うし	43歳 昭和５９年生 ね(ねずみ)
	60歳 昭和４２年生 ひつじ	61歳 昭和４１年生 うま	62歳 昭和４０年生 み(へび)
女性の厄年	18歳 平成２１年生 うし	19歳 平成２０年生 ね(ねずみ)	20歳 平成１９年生 い(いのしし)
	32歳 平成７年生 い(いのしし)	33歳 平成６年生 いぬ	34歳 平成５年生 とり
	36歳 平成３年生 ひつじ	37歳 平成２年生 うま	38歳 平成元年生 昭和６４年生 み(へび)

※近年は女性61歳の還暦も厄年とする場合もあります。

令和八年　甲子祭

二月十九日(木)初甲子
四月二十日(月)
六月十九日(金)
八月十八日(火)
十月十七日(土)
十二月十六日(水)

お宮あれこれ～「午（うま）」の話～

来年（令和八年）の干支は「丙午」で、「午年（うまどし）」に当たります。そこで、今回は干支にちなんで「午」のお話をしてみたいと思います。

「午」は「うま」と読まれます。「うま」ということばはもともとは「馬」の音読み、つまり中国語音である「マ」が変化したものだと言われています。そして、平安時代以降は「むま」と表記している例が多数あります。たとえば、平安時代の「源氏物語」「夕顔」の巻には「我がむまをば奉りて、御供に」という一節があります。ちなみに、「うめ（梅）」も平安時代以降は「むめ」と表記された例が多く、同じように中国語音である「メ」が変化したものだという語源説があります。

かつては時刻や方角をあらわすのに十二支をあてて呼んでおり、「午」は現在の午前十二時を中心とした前後２時間をあらわしました。「正午」「午前」「午後」などのことばもこのこ

とに由来しています。また、方角としての「午」は真南にあたります。

馬にまつわることばとして右手のことを「馬手（めて）」という言い方があります。これは「馬に乗ったときに手綱を取るほうの手」という意味です。ちなみに左手は弓をとるので「弓手（ゆんで）」といいます。

そもそもウマは古来乗馬用として飼育されました。特に合戦の際には軍馬として重要でした。また、人や荷物を運ぶ際にも古くから用いられていました。

古代の律令制のもとでは、官道に一定の間隔で宿場が整備されました。これは「駅」と呼ばれ、人を運ぶための「駅馬」が備えられていました。そのため、「駅」と書いて「うまや」とも読まれていたようです。江戸時代になると、駅馬が不足したときのために駅の近くの村から馬を供出させるようになりました。こうした村のことを「助郷（すけごう）」と呼んだそうです。

次に、ウマと神社の関係についてみていきましょう。まず、よく知られているのが「初午（はつうま）」です。二月最初の午の日で、京都の伏見稲荷（ふしみいなり）をはじめとして、お稲荷様のお祭が行われます。初午祭は春の到来を告げるお祭で、一年の間食べものに困らないようにと祈るものです。

ウマは神の乗り物とも考えられていたので、神馬（しんめ）として神社にウマを捧げることがおこなわれていました。たとえば千葉県君津地方では「馬出し」といって、神祭用具の一つである御幣（ごへい）を背に飾り付けたウマを引いて参詣（さんけい）させるという儀式があります。また、走る馬の上から矢を射る、「流鏑馬（やぶさめ）」行事は鎌倉の鶴岡八幡宮をはじめ各地で行われています。福島県相馬市の「野馬（のま）追い祭」も騎馬武者が登場することでよく知られています。

ただ、生きたウマは世話をする必要があるため、代わりに木馬を奉納することもあったようです。そして、生きたウマも木馬も奉納できない人たちのために、絵馬を奉納するようになった、という説もあります。

ウマに関する年中行事も少しみてみましょう。埼玉県入間市では正月六日の晩を「馬の年越」と呼び、ウマを飼う家ではこの日に年越をするそうです。また、岩手県上閉伊（かみへい）郡では、六月十五日を馬祭、または「馬こ繋（つな）ぎ」といって、キビで一尺（約三十・三センチメートル）ほどのウマ二つと馬槽（ばそう）をつくり、シトギ（神前に供える餅）と甘酒をいっしょに入れて、早朝に産土神（うぶすながみ）のご神前や田んぼの水口の所へ持って行ったそうです。農神（のうがみ）様はこのウマに乗って作物の出来具合を見て回られると言われていました。香川県では一般に、八月一日を「馬節供」といっており、初めて男の子をもうけた家では前月二十七、二十八日ごろから準備をして、米の粉でいろいろなウマの形をつくって飾るとのことです。

ウマを飼っている人々の間では古来、馬頭観音（ばとうかんのん）が広く信仰されていました。とくに、ウマが足を踏み外しそうな険しい道などには、馬頭観音の石塔が立てられてお

り、馬頭講とか観音講などの名でよばれる信仰グループが作られていました。また、サルは馬屋の守護神と考えられていたので、馬屋にはサルがウマの手綱をとっている絵馬がよく掲げてあるそうです。毎年正月に「厩（うまや）祭」を行う所がありますが、このときには猿回しを招く風習があったようです。

ウマに関する伝説としては、古来神がウマに乗って降臨するという信仰から、その馬蹄（ばてい）の跡を残した石の伝説「馬蹄石（ばていせき）」が各地にみられます。「鞍掛石（くらかけいし）」もあちこちにありますが、これは御神幸のとき神馬を休ませた際、その鞍を掛けた石だとされていることが多いようです。また河童がウマを川や池に引き込むという伝説（駒引き伝説）も多くみられ、馬引沢という地名にもなっていることもあります。さらに、「馬塚」という伝説も多く、いくさに負けた武将の乗っていたウマを埋めた塚とされます。

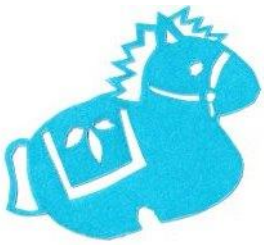
徳島県をはじめ福島県、八丈島、淡路島、壱岐（いき）などでは、「首切れ馬」「首なし馬」というウマの妖怪にまつわる話が伝えられています。これには神様が乗っているとか、首だけが飛んでくるなどといわれ、大みそかや節分の晩に通るので四つ辻に行くと見えるとされます。そのほか「旅人馬」「馬方山姥（うまかたやまうば）」という昔話が各地で語られています。

このように、ウマにかかわる神事や伝説は数多くあり、人間とウマとの長い交流の歴史を感じさせます。来年は疾走する競走馬のように難しい局面があっても切り開いていきたいものです。

参考文献　［ジャパンナレッジ利用］『日本国語大辞典』『日本大百科全書』『世界大百科事典』

祭礼・祈祷などのご案内

○次回甲子祭
　令和八年二月十九日（木）　午前五時～正午



○開運千人講祈祷祭　毎月一日　午前六時～正午まで

○諸祈祷受付　　商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈祷を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは電話もしくはメールにてお願いいたします。

　不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しください。のちほどこちらからご連絡いたします。

〈お問い合わせ・お申し込み〉
携帯　　○八〇―一九八七―八七一六
eメール　　daikokujinja@gmail.com

（連載まんが）

大吉うさぎ

～神社豆知識　その20～

次号発行予定

「だいこく通信第六十三号」、いかがでしたか。次号「春の号」は、令和八年四月二十日甲子祭に発行予定です。

「だいこく通信」第六十三号　令和七年十二月二十一日発行
編集・発行　大國神社社務所
〒一七〇―〇〇〇三　東京都豊島区駒込三―二―十一
http://www.daikokujinja.org